

「広島」(続)

立命館大学文学研究科 落合優翼

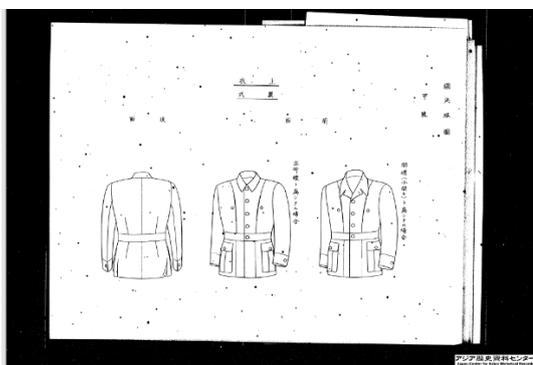
前回の補足

① 国民服について

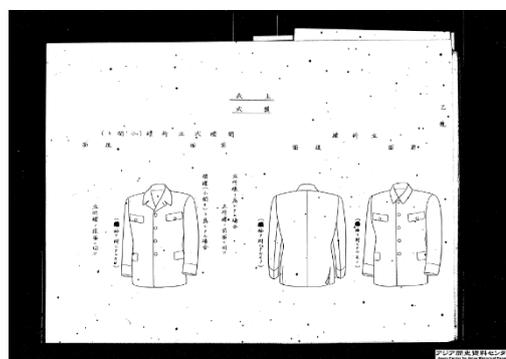
1940 (昭和 15) 年 11 月 1 日の「国民服令」によって、一般男性が全ての場で着用可能な服として、カーキ色 (茶褐色・国防色) の国民服が定められた

国民服の着用が奨励されたが強制ではなかったため、当初の普及率は 20%程度であったが、空襲が本格化したことで、身動きの取りやすい国民服は一挙に広まった¹

【写真】「勅令第七二五号 国民服令²」



・甲号 上衣



・乙号 上衣

② 日本での原爆開発³

戦時中の日本でも、陸軍・海軍の核開発計画が独立して存在

陸軍…二号研究 (1943 年 9 月～終戦)、中心人物：仁科芳雄 (理化学研究所)

海軍…F 研究 (1944 年 10 月頃～1945 年 7 月)、中心人物：荒勝文策 (京都帝国大学)

規模は陸軍の方が大きく、資源調査、ウラン濃縮のための試験的な分離装置の建設が実施

米：マンハッタン計画…20 億ドル⇔日本…約 500 万ドル (2000 万円)

⇒日本の戦時核開発は、日本周辺地域のウラン資源の不足や、研究期間の短さから、積極的な研究成果を挙げる前に終戦を迎えた

¹ [戦前と戦後で男性のファッションはどう変わったの? | 公文書に見る戦時と戦後 一統治機構の変転一 \(jacar.go.jp\)](https://www.jacar.go.jp) (アジア歴史資料センター、最終閲覧日：7月19日)

² 「御署名原本・昭和十五年・勅令第七二五号・国民服令」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. A03022512500、御署名原本・昭和十五年・勅令第七二五号・国民服令 (国立公文書館)

³ 山崎正勝『日本の核開発：1939～1955』續文堂出版、2011年、4, 37, 38, 45-47, 50, 53, 91, 92頁。

【第 11・12 段落】 臨床検査室にて

L 中佐は病理学的検査の仕事に没頭していて、臨床検査室にいた私たちとの接触の機会は、多くなかった。日本側の調査団の大多数は、土地の病院へ患者を診に毎日出かけていた。調査団の検査室と寝泊りの場所になっていた郊外の陸軍病院に、一日残っていたのは、病理検査室の L 中佐と石井博士を除けば、中尾博士と臨床検査室の四、五人だけであった。その研究室で日本側からいくさの話の出ることは、ほとんどなかった。原爆の投下という米国の行為そのものについても、誰かが意見をいうことは、ほとんどなかったし、時としていくさ一般の問題に触れたのは、米国側では M 大佐、日本側では都築教授だけである。ある日 M 大佐は臨床検査室に入ってくると、黙って黒板に、「紙と木の家に住む者は他人に石を投げてはならぬ」と大きく書いて立去った。「戦争をはじめたのが、愚かだ、ということか。馬鹿にしているな」と誰かが呟いたが、それはそれだけのことで終わった。都築教授は、いつものように、流暢な英語で雑談し、「戦争は終わったのだから、今はわれわれがあなた方に協力して、合同調査が順調に進んでいる、しかしこの次の戦争では、われわれが勝ちますよ」といったことがある。都築教授は、あきらかに、それを冗談としていったのだが、その冗談は少なからぬ反応を米国側にまきおこした。その冗談を私たちと共に聞いていたのは、L 中佐と同じイェイル大学医学部の L 中尉だった。毎日同じ検査室で仕事をしていたので、私はこの若い米国人の医者と親しくなりはじめていたが、都築教授が検査室を出るや否や、彼はいくらか興奮した面持ちで、「今のを聞いたか」といった。「何という冗談だ！それもこの広島の状態のまんなかでだ！」——たしかに「この次の戦争」ということばは、一九四五年一〇月現在、日本中の都会が焦土と化し、日本国民が米国の食料援助で辛うじて飢えを凌いでいたときに、私の耳にも異様に響かなかったわけではない。

後になって山間の宿屋の一部屋で、L 中尉と二人きりで、相對したときにも、彼はいった、「君は都築教授を軍国主義者だと思うか」。「都築教授は、海軍の軍医少将でもあった」、と私はいった、「君は帝国軍人が軍国主義者でなかったと思うのか」。私たちはそのとき二人だけで旅をしていた。

① 「日本側の調査団の大多数は～四、五人だけであった。」

・日米調査団が滞在した病院…広島第一陸軍病院宇品分院（広島市南区宇品町）⁴

⁴ 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』岩波書店、2018 年、313 頁。

- ・東京帝国大学医学部診療班「原子爆弾災害調査報告書⁵」によると、同診療班は、10 月 15 日から 11 月 16 日まで、爆心地（米国側設定：護国神社鳥居）から 5km 圏内の 26 か所で、合計 5120 名に対して調査を実施。

② 「その研究室で～日本側では都築教授だけである。」

- ・合同調査団の接触の枠組み…占領軍と被占領国民（支配・被支配関係）、医学にかかわる専門領域→日米間の不对等な関係と、検査室という専門領域を扱う場においては、日本側からいくさの話や、米国の原爆投下について意見を言うことはなかった

- ・例外：M 大佐と都築教授はいくさ一般の問題に触れた

都築教授は「占領軍と被占領国民との接触という枠」や「血液学上の技術問題という極度に専門化された領域」から「はみ出したところで、米国側と交渉していた⁶」人物

③ 「ある日 M 大佐は～それだけのことで終わった。」

- ・「紙と木の家に住む者は他人に石を投げてはならぬ」

英語の諺 *People who live in glass houses should not throw stones*

「ガラスの家に住む者は石を投げてはいけない」

意味：弱点を抱えている者が他人を非難してはならないというたとえ。逆に石を投げ返されたら、自分の家もたちまち壊れてしまう。⁷

- ・「紙と木の家に住む者＝日本人」は、「他人＝アメリカ人」に「石を投げてはならぬ＝戦争を起こしてはいけない」。

→アメリカよりも国力の劣る日本が、アメリカに戦争を仕掛けた結果、東京大空襲（都市無差別爆撃）、沖縄戦、広島・長崎への原爆投下を受け、日本は破壊された

- ・M 大佐は「*People who live in glass houses should not throw stones*」という諺の「glass houses」を「紙と木の家」（日本家屋）に言い換えることで、アメリカに対して戦争を仕掛けた日本を、原爆という「石」が投げ返された広島で批判した
- ・この批判に対しては、「戦争をはじめたのが、愚かだ、ということか。馬鹿にしているな」と誰かが呟いた」だけで終わり、誰も M 大佐に反論・意見するものはいなかった

⁵ 『原子爆弾災害調査報告』 p. 522 (『原子爆弾災害調査報告第 3 冊』)

⁶ 加藤周一『続 羊の歌』岩波書店改訂版、19 頁（初版 1968 年）。

⁷ 北村孝一、武田勝昭編『英語常用ことわざ辞典』東京堂出版、1997 年、168 頁。

④ 「都築教授は、いつものように〜響かなかったわけではない。」

- ・都築教授は、1925 年 2 月から 2 年間ドイツ・アメリカに留学、更に 1936 年 7 月～1937 年 9 月に米国出張をしていた⁸ため、流暢な英語を話すことができ、ある程度アメリカの文化を理解していたのではないだろうか。
- ・都築教授の「戦争は終わったのだから、今はわれわれがあなた方に協力して、合同調査が順調に進んでいる、しかしこの次の戦争では、われわれが勝ちますよ」という冗談なぜ、このような冗談を言ったのか？

鷺巣 (2018) …もう一度戦争をしてアメリカに勝つという意思を表明したのではなく、日本側が進めていた研究にあとから乗り込んできた米軍に対する不満と、「対等の研究」だと考えていたにもかかわらず「占領軍主導の研究」になっていたことに対する抗議の意思が含意されていた⁹

→都築教授は英語で冗談を言うことによって、米国側への不満を表明

都築教授は、米国側に専門領域外のことで意見を言わない日本人医師とは、対照的な人物として描かれる

- ・加藤と共に都築教授の冗談を聞いていた L 中尉（ロッジ中尉）は、戦争によって破壊しつくされた広島で、都築教授が言った冗談に少し興奮した反応を示す
国土が焦土と化し、食料政策も他国に依存している現状において、都築教授の冗談は加藤にとっても「異様に響く」ものであった。

・（補足）占領初期の食糧問題¹⁰

- ・厚生省の調査（1945 年 6 月）によると日本人の所要栄養摂取量は平均 3000 カロリーとされていたが、大都市部（東京や京都など）では 1400 カロリー程度、地方都市（盛岡・前橋・山口など）は 1200～1300 カロリーという状況¹¹
- ・1945 年 9 月の西日本を中心とした風水害被害による、産米生産高の下方修正→需要に対して 280 万トンの不足

閣議決定「食糧輸入に関し連合軍に対し支援方要請の件」（1945 年 9 月 18 日）により、GHQ に対して穀類 300 万トンの食糧輸入を懇請→10 月初旬の風水害被害によって更に生

⁸ 「〈座談会〉蘇る日本のこころの支援」『精神獣医学』53 巻 9 号、2011 年 9 月、837 頁。福川秀樹『日本海軍将官辞典』芙蓉出版、2000 年、250 頁。

⁹ 鷺巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』岩波書店、2018 年、313, 314 頁。

¹⁰ 小田義幸『戦後食糧行政の起源』慶應義塾大学出版、2012 年、第四章—第 7 章。

¹¹ 松田延一『日本食糧政策史の研究 第三巻』食糧庁、1951 年、214 頁。（出典：国立国会図書館デジタルコレクション）

産高が下方修正され 300 万トンでは不足したが、まだ 300 万トンの輸入も実現されていなかった

GHQ は食糧危機などの経済問題は、基本的には日本政府の責任で解決させる方針を取り、自力救済を第一とし食糧輸入実現に慎重。後に GHQ が日本の食糧危機を認識し本国政府と交渉を行い、食糧輸入が本格化するのには 1946 年 6 月以降であった。

→1945 年 10 月時点の日本は、相次ぐ風水害被害により産米生産高が低下し、自国だけでは国内需要に応える状況にはなく、GHQ からの食糧輸入に頼るしかない状況

このような状況での、「この次の戦争」という言葉は異様であった

⑤ 「後になって山間の宿屋の一部屋～二人だけで旅をしていた。」

軍国主義

一国の支配階級が、侵略戦争を目的として国民を軍事体制に従属させ、政治・経済・文化のあらゆる面よりも軍事を優先させるような体制を作り上げたとき、その支配のイデオロギーと体制とを軍国主義と呼んでいる。したがって軍国主義は、戦争もしくは戦争準備という目的のための手段であり、階級社会のそれぞれの段階で現われるが、とりわけ帝国主義段階における主要な政治的特徴となっている。¹²

・都築正男の海軍軍医としての経歴¹³

1917 年 12 月：東京帝国大学医科大学医学科卒業/海軍軍医、1933 年 6 月：東京帝国大学教授兼海軍軍医学校教官、1936 年 7 月～1937 年 9 月：米国出張、1939 年 12 月予備役（軍医）

- ・L 中尉は後に加藤と二人で旅をしている時に、都築教授は軍国主義者かと質問をした。それほど、都築教授の「次の戦争では、われわれは勝ちますよ」という冗談は L 中尉に衝撃を与えたか

¹² 藤原彰「軍国主義」『国史大辞典』（JapanKnowledge）最終閲覧日：2023 年 7 月 17 日

¹³ 「〈座談会〉蘇る日本のこころの支援」『精神獣医学』53 巻 9 号、2011 年 9 月、837 頁。福川秀樹『日本海軍将官辞典』芙蓉出版、2000 年、250 頁。

【第 13 段落】旅の準備

中尾博士と私とは、広島で、血液と骨髄の標本をしらべているうちに、問題を放射線による造血組織の破壊という面からだけではなく、その回復過程という面からも眺めてみたいと考えるようになっていた。しかしそのためには、われわれが知っている患者の、その後の経過を調べてみなければならない。ところが回復期の患者は、広島近在の病院を去って近所の農村に散っている。住所のわかっている例を拾って、その住所をあらかじめ地図に記入しておき、「ジープ」に器材を積んで、片端から歴訪するほかに、資料をあつめる方法はなさそうに思われた。私はその考えを、中尾博士に話し、ひとりでは行けないので、L 中尉にも相談した。彼は大いに賛成して、L 中佐にわれわれの考えを説明し、「ジープ」の手配と一週間の休暇をもらおうといった。それまで一ヵ月以上も検査室のなかばかりで暮し、ほとんど一歩も外へ出なかった私たちは、たしかに外の空気を吸いたくもなっていたのである。許可をもらったときに、L 中尉はいった、「L 中佐は仕事の鬼だ、しかし今度はぼくも大分働いたから、休暇をくれたのだろう」。「中尾博士は仕事の鬼だ」と私もいった、「とてもかなわないがわれわれもよく働いた、われわれには気晴しが必要なのだ」——私たちは二人で、検査用の器具を準備し、地図をあつめ、予備の燃料と携帯食糧を積みこみ、一台の「ジープ」を大急ぎで用意した。出発のときに彼は小銃をもってきて、後の空席の下におきながら、弁解するようにいった、「こんなものが必要でないことはわかっているけれど、戦時中の占領地ではこうすることになっているのだ……」。(23～24 頁)

① 「中尾博士と私とは～考えるようになっていた。」

- ・「回復過程」への着目について

鷺巣 (2018¹⁴) …日米合同調査団において、米国側医師団は原子爆弾の破壊効果に着目し、日本側医師団は破壊からの回復に着目していた。「回復過程」に研究を上げたとき加藤が明記したのは、米国側医師団と日本側医師団の姿勢の違いについて、記しておくべきだという認識

- ・中尾博士と加藤がなぜ「回復過程」に着目したのかを、『中央公論』（1967 年 7 月）に掲載された、加藤と垣花秀武（東京工業大学教授）との対談記事から考える

¹⁴ 鷺巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』、304 頁。

【加藤周一、垣花秀武「科学と文学の間」『中央公論』1967 年 7 月、204, 205 頁。¹⁵⁾】

純粹の科学と技術との区別にもどっていえば、科学的な知識の体系には自己目的性というものがある。研究をつづけてゆく歴史的過程で、いくつかのわからない点が出てきていて、その穴を埋めると、もっと体系が自己完結的になる。だからその穴を埋めようということがあるでしょう。自然に関する知識の体系を、なるべく普遍的に、なるべく自己完結的に、なるべく単純に美しくしようという、体系そのものに根ざした欲求が科学者にはありますよね。(中略)

つまり、科学と技術とでは、研究の動機というか、研究を導いていく原理が違うんですね。無償的な知識の体系自体の要求に従って、それを完璧化するという動機と、体系の外にあたえられた目的を達成しようとする動機。この、前のほうの動機については、世間に、あまりよく伝わっていないと思うのですよ。しかし科学者というものを理解するために、このことがわからなければ、何もわからない。

・科学者…知識体系自体の要求に従って、知識体系を完璧化する動機→研究を進めていくうちに未知な事柄と遭遇し、その未知を研究し既知な事柄とすることで、知識体系自体の完成を目指す

・放射線による造血組織の破壊だけでなく、そこからの「回復過程」を研究することで、放射線の造血組織への影響という問題をより理解したいという、科学者としての欲求

② 「しかしそのためには、～なっているのだ……」。」

・加藤は患者の追跡調査について L 中尉に相談し、彼と上司の愚痴を言い合うなどお互いの距離感は近くなり、二人で追跡調査の準備をした。しかし、L 中尉は必要ないと弁解しつつも、小銃をジープに載せた。→占領軍と被占領国民の枠組みは維持

・加藤周一「ヒロシマ・ナガサキ五〇年」（初出：1996 年）

「われわれは周辺の地域の病院にいた患者たちの調査から始めたのですが、当時市内で爆をして症状がなかった、兆候がなかったので、家に戻ったり田舎に帰った人たちの追跡調査もしなければいけないということで、私とアメリカ人の医師二人で、一カ月くらいその人たちを訪問して廻りました。¹⁶⁾

→アメリカ人の医師（L 中尉）と共にジープで広島県内を移動したのはおそらく事実であるが、その期間が一週間かそれ以上なのかは不明

¹⁵⁾ 〈対談〉加藤周一、垣花秀武「科学と文学の間」『中央公論』82 (8)、1967 年 7 月、204, 205 頁。

¹⁶⁾ 加藤周一「ヒロシマ・ナガサキ五〇年」『加藤周一セレクション 5』平凡社、1999 年 399, 400 頁。

- ・加藤は「故旧忘れ得べき」（『朝日新聞』1922 年 1 月 20 日付夕刊「夕陽妄語」）において、L 中尉と加藤がそれぞれ日米側でいちばん若い参加者であったと語る¹⁷

→二人が日米側でいちばん若い参加者であったことも、二人の仲が深まる一因であったと考えられる

【第 14 段落】二人旅

出発した私たちは、夜道に迷い、山道で豪雨に遭い、破壊された橋を迂回し、泊るところがなくて町の警察と交渉し、それでも村から村へ患者の住んでいるところを訪ねながら、旅行をたのしんだ。行く先々で、占領軍の「ジープ」への反感や敵意に出会うことはなかった。その代り、時には好意があり、時には追従があり、多くの場合には好奇心があった。山村にはいくさの破壊が及ばず、占領軍はまだそこまでは浸透していなかった。私自身は旅の間に、土地の人間でもなく、占領軍でもなく、土地の人間と占領軍の一人の医師との出会いの傍観者としての自分を、実に強く意識した。土地の人々が、「ジープ」のなかの私を、占領軍の側の人間とみなしているということ、私ははっきり知っていたが、それ以上に私自身が占領軍に属さないということを知っていた。

① 「出発した私たちは～旅行を楽しんだ」

- ・接触の場の変化…検査室での接触→広島 of 山村を二人旅、専門分野以外での接触

② 「占領軍の「ジープ」への反感や～ということを知っていた。」

- ・戦時中は「鬼畜米英」と日本人は絶叫していたはずだが、占領軍に対する敵意には出会わなかったか→日本人の変わり身の早さ？ or 農村には「鬼畜米英」という認識は浸透していいなかった？

鷺巣（2018¹⁸） …加藤は広島の人々と L 中尉の出会いを「傍観者」として観察している自分を意識しつつ、自分が土地の人間でもなければ、占領軍に属する人間でもない、という疎外の意識を感じる→自分は占領軍に属する人間ではないと意識した

¹⁷ 加藤周一「故旧忘れ得べき」（『朝日新聞』1922 年 1 月 20 日、『加藤周一自選集 8』岩波書店、2010 年、287 頁。

¹⁸ 鷺巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』、314, 315 頁。

【第 15 段落】「民主主義」と裏切り

旅は私と L 中尉とを近づけ、会話はしばしば医学上の技術的な領域をはみだすようになった。私の英語は相変わらず不十分だったが、次第に慣れて、相手のいうことが、いくらかわかるようになっていた。道中見聞する風俗について相手は質問し、私は説明をした。説明は表現の能力に応じて、簡単にしたのである。「あの大きな建物は何か」「寺である」「日本の農村は貧しいのに、なぜ大きな寺を建てて、学校や工場を建てないのか」「学校は寺の次に大きい建物である。工場は建てても爆撃でこわされた。……」。しかしもちろん私たちは「民主主義」のことも話していた、あの普遍的な理想としての「民主主義」のことも。その理想が米国において大いに実現されているものだという点でも、私たちの意見は一致していた。「それは日本帝国において広く認められた意見であったか」「いや、日本帝国においては禁止されていた意見であって、極めて少数の人間がそう考えていたにすぎない」「君は戦時中その少数の一人だったのか」「そうだ」「それでは日本帝国に対する裏切りではなかったか」——「裏切り」という言葉は、突然、私を襲い、矢のようにつきささり、しばらく私はたじろいだが、次の瞬間にはたちなおっていた、「日本帝国とは何か」と私は自分がいったのを覚えている、「政府と人民である。政府が人民を裏切った場合には、政府に反対する少くとも——政府を支持しない、ということの他に、人民を裏切らぬ道はない。しかるに、君は今戦時中の日本帝国政府は、民主主義的でなかったといった。民主主義的でない政府は、定義により、人民の本来の権利を裏切る政府である。故に政府に忠実であれば、人民を裏切り、人民に忠実であれば、政府を裏切る。ぼくの考えは日本の人民に忠実であったにすぎない……」。「なるほど」と L 中尉は呟き、そのまま彼自身の考えを追うように黙りこんでしまった。

① 「旅は私と L 中尉とを近づけ、～爆撃でこわされた。……」。

・接触の場が検査室から広島農村に変わり、二人で旅をしていた加藤と L 中尉の会話は旅の道中でみた風俗に関する事など、専門領域外の会話を行う

・L 中尉には、学校（教育）・工場（産業）といった、人々の生活を豊かにするものよりも、大きな寺（宗教）があることに違和感を覚える

→この L 中尉との会話は、日本が精神的側面を重視し、外からみると異様であることを示すねらい？

② 「しかしもちろん私たちは～黙りこんでしまった。」

・L 中尉から加藤の「日本帝国」に対する姿勢は「裏切り」ではないかと指摘される

鷺巣 (2018) …加藤は、公的な生活では、親しい人を「裏切らない」ことを信条として生きた。何よりも「裏切り」であることを嫌った。戦争につながる可能性のあるものに反対する理由として、親友を「裏切りたくない」ことを挙げる。そういう信条をもつ加藤が、「それでは裏切りではないか」と問われて一瞬たじろぐ¹⁹。

・加藤は人民に忠実であったために、政府を裏切ったと返答

鷺巣 (2018) …政府と人民の関係は、人民の政府に対する信託関係であり、信託関係が崩れれば、人民は政府に対して反逆する権利を持つ。忠誠と反逆は背中合わせであると同時に、反逆は「もうひとつの忠誠」²⁰

【第 16・17 段落】 広島での経験

私はその後今日まで、L 中尉に再び会ったことがない。L 中尉は、今でも私の議論に「なるほど」というだろうか。今では私も自分の考えをもう少し巧妙に表現することができるだろう。しかし問題は、表現の巧拙ではない。

広島から帰ったときに、私は疲れていた。私はその後長い間広島を考えなかった。

① 「私はその後今日まで、L 中尉に再び会ったことがない。」

・加藤は広島から東京に戻り、L 中尉の助力で彼が勤務していた占領軍病院（聖路加病院）の図書館で米国の医学雑誌を読んだ。加藤が L 中尉と再会するのは、1991 年 11 月のロサンゼルスであった²¹。

② 「広島から帰ったときに、私は疲れていた。私はその後長い間広島を考えなかった。」

広島の人間を「症例」に還元し観察する「堪え難い」仕事を終えた加藤は、肉体的にも精神的にも疲れていた。そして加藤は、長い間「広島」を考えなかった。

¹⁹ 鷺巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』、316 頁。

²⁰ 同前。

²¹ 前掲加藤 (2010)「故旧忘れ得べき」『加藤周一自選集 8』287 頁。

・「広島」を語れなかった理由

【加藤周一『二〇世紀の自画像²²』（2009）】

加藤 ……。語るに難しい。人間の苦しみです。被爆者の被害の途方もない残酷さ。三段階でもって苦しむわけですから。しかも一度に死んだのはたいへんな数で、大量殺戮です。真っ昼間、一撃で、一瞬間のうちに数十万の人が消えちゃうなんて、今までの人類の歴史にない衝撃で、神がかり的な気がします。

この衝撃を語るのには非常に困難で、修辞法がないんです。だから文学でも、原爆についての作品はあまりないですね。井伏鱒二さんの『黒い雨』もだいたい後でしょう。原爆には、語る事の難しさ、言葉が用意されていないという特徴がある。

- ・原爆の爆風、熱波による大量殺戮と、放射線による三段階の苦しみ
前代未聞の経験で神がかり的なものであり、原爆について語る修辞法や言葉が用意されていない→言葉で語る事の難しさ

【同前加藤（2009²³）】

なぜ原爆を落としたのかということについて、地上戦になるよりも犠牲者が少ないから正当だとする議論があることは先に触れました。しかし、私はそれに反対です。そう簡単ではないと思う。

政治を語る時、ただちに個人の顔ではなく人間を数字に還元して、統計の問題にします。本来、たとえ一人の人間を殺すのでもたいへんな問題で、数字に還元できない。しかし数字に還元しなければ、政治の話ができない。私にはその違和感がある。

これは政治に限らず、客観的な医学問題・社会問題を扱うのにも統計が出てきます。たとえば医学では「症例」という。「症例」という概念は、固有名詞の消去です。いちいち固有名詞を言っただけじゃ医学的習熟ができないし、科学が成り立たない。

科学といい、統計という発想の中には、個人を消去して特定の 카테고리の中の番号に還元してしまうものの考え方が内在している。それは残酷です。私はそこにこだわります。私がしばらく原爆の話をしなかった理由の一つは、そういうことと関係しています。

²² 加藤周一『二〇世紀の自画像』2005年、筑摩書房、115, 116頁。

²³ 加藤周一『二〇世紀の自画像』2005年、筑摩書房、116, 117頁。

- ・広島でみた人々が数字や「症例」に還元され、個人の経験が失われることへの違和感
いかに広島の人々の経験や、自身の広島経験を語るか
- ・海老坂 (2013²⁴) …心の動きについて語るのを封印したと考える方が自然ではないだろうか。ある時期から広島について、原爆について、加藤が積極的に語り出すが、その姿勢にはかつての判断停止に対する悔恨のようなものが潜んでいるのではないか
- ・鷺巣 (2018²⁵) …加藤は重たい経験をもつ広島の被爆者たちを「観察」することができず、加藤にとっても広島での経験は重たく、簡単に言語化できるような問題ではなかった
- ・加藤が初めて自身の広島経験を公に語ったのが『朝日ジャーナル』(1967 年) の『続 羊の歌』であった
→加藤は自身の経験を整理し、広島の人々と自分の経験を自らの言葉で語った

²⁴ 海老坂武『加藤周一』岩波書店、2013 年、158 頁。

²⁵ 鷺巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』、318 頁。